

奥山久米寺西方の調査

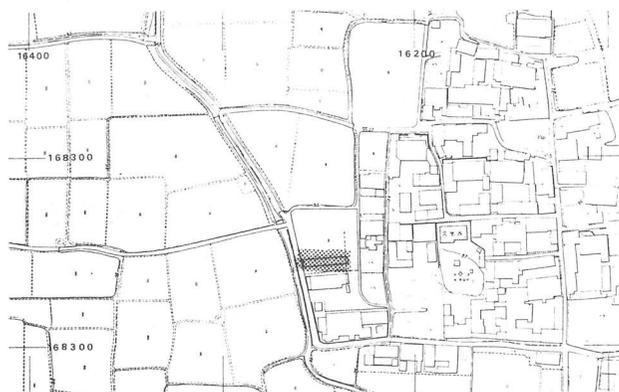
(狂心渠推定地)

(昭和51年8月～昭和51年9月)

この調査は、家屋新築に伴う事前調査である。調査地は奥山久米寺塔跡の西約60mで、旧寺域に接し、丘陵裾に沿って幅広い低地が南北に続くその東岸にあたる。この低地は、田村吉永氏が「狂心渠」と推定する地形の南延長部にあたる。調査は、東西約20m・南北約3.5mのトレンチを設定して実施した。

調査の結果、奈良時代以前に遡る南北大溝を検出し、溝の東岸を確認した。東岸の肩には護岸用の玉石が残る。溝は調査区内では完結せず、さらに西方に続くので、溝幅は20m以上になる。溝埋土である灰色礫・粗砂混合層中には、瓦・土師器・須恵器の破片と少量の弥生式土器が含まれている。いずれも非常に磨滅しており、水は地形からみて北流していたと推定できる。土師器・須恵器は古墳時代のものを一部含むが、その大部分は7世紀後半から奈良時代後半にかけてのものである。また、この南北溝を覆う灰色粘土層からは、瓦器・土師器・須恵器・瓦の破片が出土しており、古代末～中世頃にはこの溝が埋められたと推定できる。しかし、溝の開削年代は今回の調査では明らかにできなかった。

南北溝の東岸は、先述したように奥山久米寺の現塔心礎の西約60mにあたり、旧寺域の西限を画する位置に相当する。また、田村吉永氏が大官大寺の東側で



奥山久米寺周辺地形図(縮尺4000分の1)
(網目は南北溝)

「狂心渠」と推定した幅50m程の南北方向の落ち込みの南延長部にもあたっており、これと一体のものとなる可能性もある。これを契機に、今後の周辺地域の調査によって、これらの問題の解決をはかってゆきたい。